どもいふは、舊說に方之義也といふなり、藻鹽草に　さらば潮涸し方といふ義にぞあるべき、倭名鈔には、師說を引て、潟の字讀てカタといふなり、

〔倭訓栞前編六〕かた○中略　潟をよむは倭名鈔に見ゆ、干潟の類也、潮の引たる跡の形あればいふなるべし、萬葉集に滷もよみ、新撰字鏡に洲もよめり、

〔藻鹽草五水邊〕潟

ひかた　をほひ潟　とをひ潟　潟をなみ　をほのみち、これは海のかたなくなる也、是は一說なり、只かたは方の儀也、此せつなを可用、

〔萬葉集四相聞〕門部王戀歌一首

飫宇能海之、鹽干乃滷之、片念爾、思哉將去、道之永手呼、

右門部王任出雲守時、娶部內娘子也、未有幾時、既絕往來、累月之後、更起愛心、仍作此歌、贈致娘子、

〔萬葉集六雜歌〕神龜元年甲子冬十月五日、幸于紀伊國時、山部宿禰赤人作歌一首幷短歌、○中略

反歌

若浦爾、鹽滿來者、滷乎無美、葦邊乎指天、多頭鳴渡、

右年月不記、但俤從駕玉津島也、因今檢注行幸年月以載之焉、

〔太平記二〕天下怪異事

同年○嘉暦二年ノ七月三日、大地震有テ、紀伊國千里濱ノ遠干潟、俄ニ陸地ニナル事、二十餘町也、

〔奥義抄上ノ末〕出萬葉集所名　普通名所不注○略中

名潟

滷

かしひがた　あゆちがた　あすかがた　たゆひがた

〔藻鹽草五水邊〕潟　同名所

石見潟つらけれど人にはいはずことたかひそなそへ、石井潟奥州、しほひう、けらが花、千鳥、幡磨潟はりまがたすまの月よ